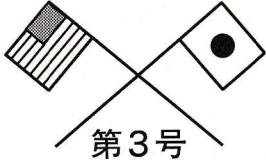


20 OCT 1997



日米エアフォース友好協会

だより

Japan America AF Goodwill Association

発行：日米エアフォース友好協会

〒107-91 港区赤坂 8-4-17

赤坂郵便局私書箱 62 号

編集：JAAGA 事務局

印刷：(財) 防衛弘済会

第2回総会（設立一周年）

—— 二代目会長に鈴木昭雄元空幕長を選出 ——



—— 総会風景 ——

JAAGAは、昨年7月5日設立以来、一周年を迎え、去る6月27日 15:00～16:00の間G.H市ヶ谷に於いて、第2回総会を開催した。

総会は、出席者63名、委任状提出者109名、よって有効に成立し、大村会長の議長、利渉理事の司会により、平成8年度事業報告、同年度決算報告、平成9年度事業計画、同年度予算、会則の一部改正、及び役員人事の議案について審議し、いずれの議案も満場一致で可決承認された。

役員人事は、初代会長の大村氏が「つばさ会」会長に就任したための交代人事で、二代目会長に鈴木氏を選出、その後任の副会長に長谷川孝一理事が選ばれたほか、事業活動の実態に沿うよう理事の増員が図られ、新たな理事の選出も行われた。離任の挨拶で大村前会長は「JAAGAの活動を通じて在日米軍人が日本人から感謝されることに喜びと誇りを

感じていることを再認識できた。

今後も日米両空軍の友好親善、相互理解に陰ながら役立ちたい」と述べた。

総会に続く記念講演会の後、懇親会が行われ、杉山統幕議長、村木空幕長、諸富施設庁長官、田村秀昭参院議員らのほか、米軍から当日着任したばかりの在日米軍司令官 J.B. ホール中将が飛び込みのかたちで途中から参加、ほかにラフォンティン5空軍副司令官、在日米軍司令部の主要幕僚十数名など、合わせて約百五十人が出席した。

ホール中将は三度目の日本勤務とか、会員の多くと旧交を温める交歓があり、会は大いに盛り上がっていた。

なお、当日政務のため欠席の久間防衛庁長官から祝辞、当日付けで米空軍副参謀総長（大将に昇任）に栄転のエバハート中将から祝電が寄せられた。



—— 懇親会風景 ——

新会長就任挨拶



鈴木会長

先程行われました第2回総会で大村初代会長からバトンを受けました。会長の鈴木であります。

私自身これまでの恩返しができる一つの機会と嬉しく受け止めております。大村会長と同様にお引き立ての程よろしくお願い申し上げます。

げます。

思い起こしますれば昨年七月、行き先きに多少の不安を感じつつも、JAAGAは、離陸をいたしました。日米両空軍の現役諸君特に村木空幕長、エバハート第五空軍司令官からの深い理解と暖かい支援によりまして、これまでの活動の一つ一つに強い手ごたえを感じ、それが大きな満足感となつてこの度のように多くのご来賓をお迎えして盛大に一周年を祝うことができました。この盛り上がり、会員一同にとってこの上ない喜びであります。

話は変わりますが、去る四月米空軍創立五十周年を祝福するとともに、わがブルーインパルスを激励するために会員有志相集いラスベガスに行つて参りました。ブルーインパルスの輝かしい活躍については云うまでもありませんが、終了後の空幕長慰労

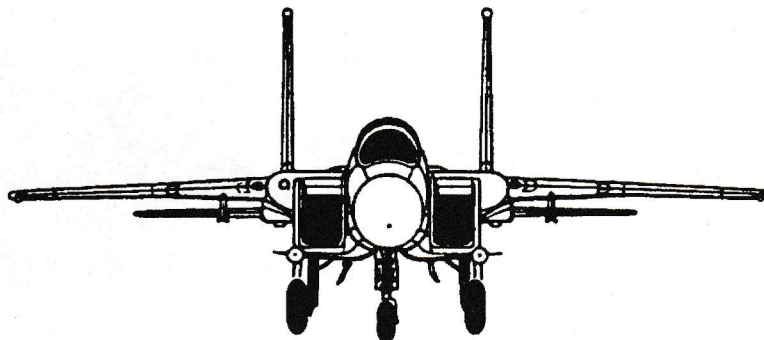
パーティーにおいて関係した日米空軍の両隊員が相互に労を称え合う暖かい心の交流を眼にして日米両空軍の関係は新たな時代に入ったことを痛感しました。

それに加えて今回在日勤務の経験が深い親日家のホール新第五空軍司令官をお迎えする、またガイドラインの見直しも大事な段階を迎えるなどこの日米空軍の新しい時代の流れの中で、これからもJAAGAが両空軍の関係を結び付ける接着剤あるいは潤滑油の様な役割を多少なりとも果たすことが出来ればと一同念じている所であります。

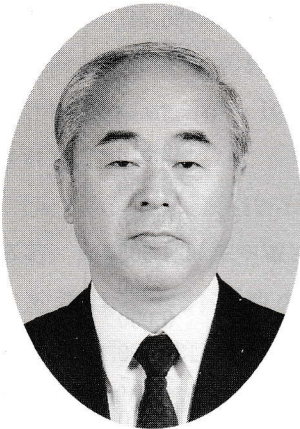
しかしながら、JAAGAは生まれたばかりの組織、まだまだ基盤は脆弱であります。承知のように竹の成長には強い節の存在が欠かせません。その意味でJAAGAの成長にとって本日は大事な節目であります。来賓各位から会員諸子へ激励をいただければ幸いです。

会員の皆さんこれからも心を新たに一つ一つ友好の活動を楽しみましょう。その活動こそが多くの方々の共感を呼んで更にJAAGAの輪が広がるものと固く信じ、私も先頭に立って汗を流す覚悟しております。

最後に重ねてご来賓各位の暖かいご理解と会員の皆さんのJAAGAへの深い愛情に心から感謝を申し上げ挨拶いたします。



防衛庁長官祝辞



日米エアフォース友好協会設立一周年記念祝賀会に当たり、防衛庁を代表し一言お祝いの言葉を申し述べます。当友好協会が昨年七月に発足以来素晴らしい成果を納めここに目出たく一周年を迎えたことはご同慶のいたりであります。わが国

の安全保障にとって日米関係と日米安全保障条約の重要性は今更申し上げるまでもないことではありますが、この日米安全保障条約を真に実効性のあるものにするため、政府といたしましても日米防衛協力の指針、いわゆるガイドラインの見直しや沖繩問題の解決等に防衛庁を中心にして日夜努力しているところであります。先週も米国のデンバーにおいて橋本総理とクリントン大統領の間でガイドラインの見直しが順調に進展していることをお互いに評価し合っ

たというのはまだ耳新しいことであります。しかしながらこうした両国の政府レベルの行動の重要性と同時に私どもが忘れてはならないのが日米両国民の間の相互理解と友好親善の促進であります。日米両国政府間の色々な施策も両国民の理解と協力があって始めて有効に機能し真に実効性のあるものになると思います。この意味において当友好協会が昨年設立されて着実に日米両国間の理解と友好親善の実を上げつつあるということは誠に時宜を得た活動であるといえます。特に当友好協会の主目的が、安全保障の中心的存在である日米のユニフォーム又はかつてユニフォームを着ていた人達同士の交流であると知って大いに意を強くしているところであります。今後私どもも政治レベルにおいてしっかりと頑張っていく決意であります。皆さんも十二分に活躍されて共に良好な日米関係の確立を目指して手を携えてまいりたいと思っております。最後にこの一年間の会員の皆さんのご活躍に敬意を表し今後益々の発展を祈念してお祝いの言葉と致します。

入会御案内

日米両空軍のより一層の友好親善、相互理解のため、現役のいろいろな活動を側面から支援しようという本会への、一人でも多くの参加をお待ちしています。入会についての連絡は次のとおりです。

〔郵便〕 〒107-91 港区赤坂8-4-17 赤坂郵便局私書箱第62号

日米エアフォース友好協会 会員担当行

〔FAX〕 03-3780-2945 石母田 治（日本航空電子工業）

〔電話〕 03-3780-2961 同上

03-3489-1120 菅原 淳（東京航空計器）

03-3507-9253 齊藤 嘉夫（日本生命）

03-3639-9814 工藤 公光（丸文）

米太平洋空軍及び在日米軍／第五空軍 司令官の交代

6月27日、横田基地において太平洋軍司令官 Admiral Plueher の統裁のもと指揮官交代式が実施され Lt.Gen. John B. Hall Jr が新司令官に任命された。

Lt. Gen Hall は、1967年マサチューセッツ大学を卒業、前職は太平洋空軍司令部の計画部長、日本での勤務は嘉手納基地の18 TAC司令の他、1987. 7から2年間、横田基地で第5空軍作戦部長の経歴を有する。F-4 2,000時間の他、F-15、F-16等3,700時間の飛行経験がある。

前司令官 Lt. Gen. Everhart は General に昇任し、米空軍副参謀長に任命された。

7月11日に行われた任命式には鈴木 JAAGA 会長が招待を受け出席した。また7月7日、ハワイのヒッカム空軍基地で空軍参謀長 Gen.

Fogleman から Gen. Richard B. Myers に司令官旗が手渡された。Gen. Myers は1993. 11から1996. 7まで在日米軍司令官兼第5空軍司令官として勤務した経歴を有する。

前司令官の Gen. John G. Lober は7月11日退官した。(元5空軍司令官)



指揮権の委譲式場全景

JAAGA

シンボルマークの土台決まる

当協会も多方面の関係団体・個人との交流の機会が増えるに従い、協会を象徴するロゴマーク作成の声も高まり、本誌前号によりデザイン募集案内をしたところ36点の応募があった。

去る9月10日グランドヒル市ヶ谷において理事長及び理事による投票が行われ、その結果、白井治夫氏の作品を基調として作成することが決まった。

今後、交換用あるいはバッジ、タイピン等として使用するよう、目下専門家の手にかかっている。

なお、佳作には、石母田治氏、坂本祐信氏の2点が選ばれた。



『我々はなぜ嘉手納に』

心打つ真摯な基地周辺への配慮

米空軍第18航空団司令

J. R. ベーカー准将

6月27日、JAAGAの発足1周年を記念して、総会に続いて嘉手納基地司令でもあるベーカー准将による記念講演が利渉理事の講師紹介の後、横田基地広報の市川さんの通訳により行われた。

講話は、第18航空団の沖縄における存在が、日米安保及びアジア地域の平和と安定にとって戦略的に重要であること。嘉手納基地の管理運営にあたっては、「沖縄の方々の良き隣人であらねばならない」として、その施策の実行に真摯に取り組んでいる状況が紹介された。要旨は概ね次のようなものであった。

『第18航空団は嘉手納空軍基地におけるホスト部隊である。又「世界的な関与」という米国空軍の主任務を支援するための最先端にある。横田の第5空軍司令部の隷下に属するが、米国の各軍、各省の航空部隊等の支援をも実施している。

嘉手納基地のユニークな点は、12,000 FTのR/Wが2本あり、いかなる航空機にも対応できると、沖縄という戦略的な位置にあることから、緊急有事の際には、米本土からの後続部隊の展開基地として機能できることである。

第18航空団が米空軍の「世界的な関与」の目標を如何に支援しているかは、任務に明示されている。

このため嘉手納基地を管理し、戦闘態勢にある3個中隊のF-15戦闘機、西太平洋唯一のKC-135給油機、HH-60救難ヘリ、本国基地所属ながら常時1~2機配備のRC-135、海上交通路確保のための海軍のP-3C、AWACS等の航空及び地上レーダー、そしてこれらを機動配備するために要する施設を保持し、いかなる場所でも、何時でも、何度でも、出動できる即応態勢を整え、制空権を獲得し、勝利するのが、第18航空団である。

戦略的位置の沖縄への我々の駐留は、アジア地域

の平和と安全と、その結果生ずる繁栄を支えており、日米相互の利益である。

冷戦の終結で、WWⅢの可能性は少なくなったが精強第18航空団存在の重要性は日米利益にとって今も変わることはない。

沖縄がよき要石であるためには、我々は沖縄において、よき住人でなければならない。

『そのために、次のような施策、活動を行っている』とスライドを使って紹介した。

☆騒音軽減の施策

KC-135 E/Gの交換、F-15 T/O時のA/B使用禁止飛行場使用の見直し（F-15は内側R/Wのみ使用）防音壁の拡張、サイレンサー格納庫の建設等々

☆隣人として個人的な人間関係を良好にする施策

飲酒機会の制限：許可年齢の引上げ、販売時間の短縮

☆隊員の教育用ビデオの作成及び活用

沖縄の文化を理解し、良好な人間関係を理解させる教育用ビデオを、本国の承任を得て作成、教育に活用

☆友の会活動として

オープンハウス、レコードコンサートの開催、沖縄マラソンのスポンサー、ドラゴンボートレースへのチーム参加、養老院慰問、海岸清掃等のボランティア活動

続いて、『アジア地域では、ヨーロッパと違って米国との二国間同盟又は友好関係に基づく、米軍の存在が、平和と安全を維持する重要な責任を果たしている。

この地域において、友好関係国の利益が脅かされる事態が発生した場合、我々米軍が沖縄に存在しているのと、そうでない場合とは状況が全く違う。現代戦に要求される「時間」にとって、信頼できる前方軍事力のプレゼンスこそ、紛争を抑止し、安定を促進するために必要である。そして有能な「航空力」は、信頼できる防衛を提供できるキーである。

又、嘉手納は、我々の戦闘機、AWACS 空母機、海兵隊機ありで、航空自衛隊と我々がコープノースやキーンソード等ダイナミックな演習を行う好条件に恵まれており、これまでの演習を通じ、常に新しい成果を学習し、代替要員のレベルを維持して行く上でも有益な成果をあげている。

この演習こそ、我々が日本に駐留している目的の

核心に触れる好機である。』

次で、『今春、ネリス基地で行われた米空軍50周年記念行事について紹介し、T-4 ブルーインパルスのデモフライトの素晴らしさを称賛し、そこで村木空幕長も出席した世界空軍参謀長会議が行われ、ブッシュ前大統領及びサッチャー前英国首相が挨拶し、「航空力」の価値について強調されたことと、R. R. ホグルマン空軍大将の「将来の航空力」論を紹介し、我々の未来は、新しい技術を利用する能力にかかっている。「航空力」は早くて、決定的で、戦略的で、正確な攻撃を行うことができる。

空軍は、ここ数年で再編成され、変容したが、最大の強みは、優れた要員と、変化に対応できる能力である。

日米の「航空力」の将来に期待している。これからも、自由で民主的な社会の中でプロの軍人として、困難な問題に、勇気を持ち、果敢に対処して行こう』と結んだ。

その後、活発な質疑が行われた。(紙面の都合により割愛)

講演会を終わるにあたって鈴木会長から謝辞が述べられ、記念の雛人形一対が贈呈された。



記念品を贈呈する会長

前空軍参謀総長講演『湾岸戦争の教訓』

—— 元空軍大将 マックピーク氏 ——

JAAGAは、9月10日 GH市ヶ谷で、前米空軍参謀総長 空軍大将メリル、A、マックピーク氏(かつては、サンダー・バードのソロパイロット)を招き、講演会を行った。又、翌11日には、空自幹部学校でも講演が行われ、それぞれ聴衆に多大の感銘を与えた。



マックピーク氏は、1990年8月2日のイラクによるクェート侵攻の直後の同年10月に、太平洋空軍司令官から、空軍参謀総長に就任。湾岸戦争では、航空作戦を指導し、多国籍軍の勝利に大きな貢献をした。

当日会場は、約160名の会員及び現役幹部が出席、石塚理事長の講師紹介の後、湾岸戦争の映像をまとめたビデオが映されたあと、横田のマギーさんの通訳により始められた。

講演の要旨は次のようなものであった。

8月2日のイラクのクェート侵攻に、米国は、直ちに「砂漠の嵐」作戦を立案し、準備行動に移った。世界各地に展開中の航空部隊は、急きょ、それぞれの基地から機動展開し、6週間後の9月半ばには、十分な態勢を確立していた。同時に他の軍種及び他国の友軍も展開を始めたが、特に地上軍には時間がかかった。

我々米空軍は、この間休止状態であったが、この間に上級指揮官の交替を速やかに完了し得た。

「砂漠の嵐」作戦は、翌年1月17日に、他国籍軍によるイラク及びクェートの空爆により開始され、

2月24日には、多国籍軍の地上部隊が、両国に侵攻し、4日間の地上戦闘をもって終了した。戦果及び被害は概ね予想どおりであったと述べた。そしてこの航空展開、作戦から撤収までを通して得た教訓として、

1. テクノロジーの大切さ
(1) 機動性：機動展開、空輸能力(量、距離、時間)

(2) 宇宙利用：通信衛星、気象衛星

(3) PGH(命中精度)、ステルス戦闘機(空の潜水艦)

2. 組織(一元統制の必要性)

3. 人的要素(訓練された良質な人材)

等について、具体例を挙げて説明し、次のように結んだ。これらの教訓に特に新しいものはない。即ち、3つは、戦闘における永遠の教訓であり、それを湾岸戦争で再度、学んだこと、そしてこれらの教訓の重要性を我々が理解していたことを証明することになったことに意義がある。

又、負けることは、勝つことよりも多くを学ぶことに留意しなければならない。世界中のサダム・フセイン達が、我々以上のことを学んだことは確かだ。このことから軍事専門課程は、決して完全に終了することはないと述べた。

(注) 紙面の都合により、要旨の記事となりましたが、幹部学校の「朋友」には全文掲載される予定。

米空母（インデペンデンス）乗艦体験記

—— 中島勝義会員 ——

「米空母が日本海に入った」の情報に「スクランブルがかかるぞ」と身構えていると、予想に違わず、日に3回くらい、日本海方面へ飛んだことが私にとっての米空母との繋がりであった。

今回、JAAGA企画の米空母研修の公募通知を受け、予て、死ぬまでに一度との思いがあったので応募した。幸い参加の一員に加えて頂き、宮城県の片田舎を後にした。

6月7日 午前6時 厚木基地前集合とのことであったので、他の参加者も含め殆どの者が前日からの泊り込みとなった。

厚木基地では、NAF司令スウィガート大佐の歓迎を受け、空母までの所要のブリーフィングの後、勇躍C-2輸送機に乗り込んだ。このC-2輸送機はE-2Cを輸送機に改装したものであるため窓は2カ



所、しかも小さく倉庫の中と言った感じであった。

午前7時、厚木基地を離陸、ターボプロップの騒音の中、沖縄北東100マイルの洋上に向かった。

このCV-62・インデペンデンス 8万トンの戦歴は1959年ブルックリン海軍造船所で建造・就役、大西洋艦隊に所属。1964年キューバのミサイル危機、1964年ベトナム戦争、1970年ヨルダン危機、1980年にはイラ・イラ戦争とアフガン紛争、1983年ベイルート危機とグレナダ進攻作戦等と多数の場面で活躍。1983年から3年間、就役寿命延長のためドックイン、その後、太平洋艦隊に配属された。

厚木からの約3時間の飛行も終りに近づいた。2つの窓から射し込む太陽の光線と身体に加わるGの方向で搭乗機の姿勢を判断する搭乗機が大きく旋回し、



暫しくてドドーの音と共に、座席に押しつけられ強いGを感じつつ機は止まった。

後部ドアが大きく上に開き、甲板上の光景が見えてきた。F-14、F-18、A-6等や各種の色のジャケットを着た乗組員が忙しく動いている。指示があり、洋上を全速で航行しているインデペンデンスの甲板に、ムーア准将及びスタッフ達の出迎えを受けて、降り立った。

ここでA-6をバックに参加者全員での記念撮影し、直ちに、第5空母群司令官ムーア准将の客室に通され、歓迎の挨拶、主要指揮官及び幕僚の紹介の後、我々の搭乗機の着艦のもようも収録したビデオによるブルーフィングを受けた。

我々は、2班に分かれた艦内を研修する事になった。艦内の通路は予想以上に狭かった。案内されるままについて行くと艦橋の指揮所に出た。

指揮所からは、甲板上の動きがよく見える。着艦準備に動きまわる隊員、艦橋正面の甲板では次の発艦を持つトムキャット。

艦橋の左側を見れば、折しもF-18 ホーネットが着艦のための接近中、アングルデッキ上には4本の捕捉ワイヤーが張られて着艦を待っている。

やがて、F-18が甲板上に叩きつけられるように着艦、2本目のワイヤーがアレスティング・フックにガッチリ引っ掛かり、概ね100m内で停止した。

この甲板上の情景は、空軍パイロットだった私には、全く異質なものに映る。

気づいて見れば、天気は上上、はるか水平線上には行動を共にしている駆逐艦や輸送艦が見える。

再び艦橋正面の甲板に目を遣ればF-14が大きく翼を拡げ、アフターバーナーの赤い炎を後方の遮蔽板に吹きつけ、今や遅しと発艦を待っている。

この間約1時間、アッと言う間の研修の前半終了。司令官の

客室に戻り、焼飯を添えたランチを御馳走になった。

離艦の時間が迫っている中、ムーア司令官から研修者全員に記念の帽子、フェリン艦長から我々の着艦時の写真を綴じ込んだアルバムと一人一人の名前を書き込んだ「THE ORDER OF THE HOOK」の証明書を添えた記念品を戴いた。

日本側からは、松村団長から「T-4ブルー」の模型と羽子板を贈呈して交歓した。

離艦のため、司令官及び主要幹部の見送りの中C-2に乗り込んだ、そろそろくるかなと思っていると、突然、ショルダーバンドが肩に食い込み、体が座席に強烈に引っ張られる。

後方に座っていたクルーが大きく手を回し、離艦の成功を伝えてくれた。

2時間半程の飛行で再び厚木飛行場に降り立ったときは、貴重な体験に満足し、マッカーサー元帥以上の感激で地上の人となった。

インデペンデンス号に【DNT' T TREAD ON ME】と書かれたシンボル旗らしきものが、誇らしげに掲げてあったのが気掛かりとして残るが、ともあれ、世界の平和に貢献している老インデペンデンスに栄光あれ。

(参考) 【DNT' T TREAD ON ME】は米海軍では「ナメンなよ！」意で、この旗を掲げることは現役の最古参艦のみに許される。



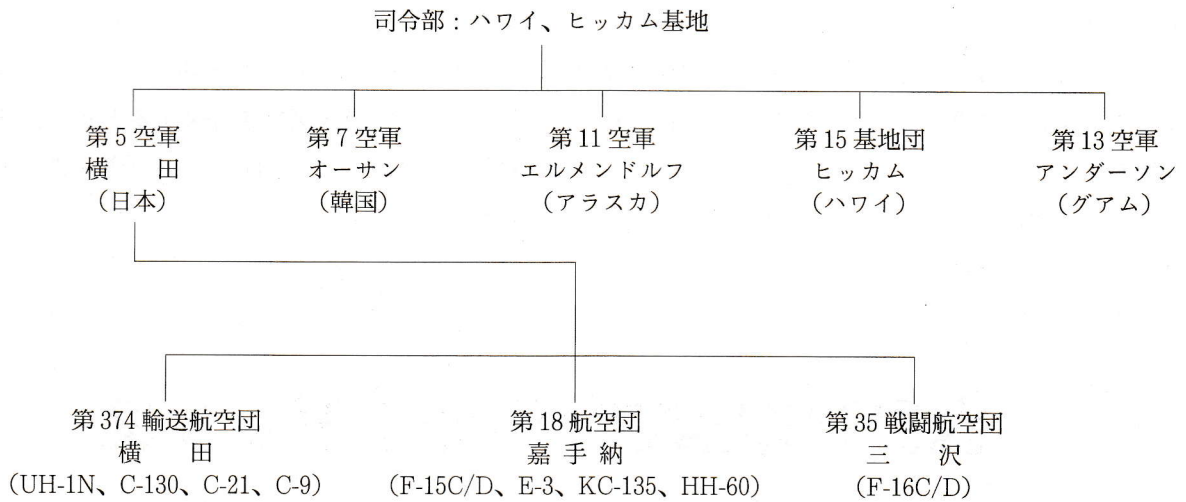
部隊

在日米軍舞台の紹介

(その1) 在日米軍司令部

ご存知の読者が多い内容かもしれないが、J A A G A活動のよりよき理解と親善の増進に役立つことを期待し、主として空軍部隊についてシリーズで紹介することとしました。始めに太平洋空軍全般図です。

(太平洋空軍全般組織)



(在日米軍司令部)

在日米軍司令部が設立されたのは1957年（昭和32年）のことで、それまで日本に置かれた国連軍司令部の韓国ソウル移駐に伴う措置であった。

当時の所在地は府中であり、初代の司令官は Sredric H. Smith Jr. 中将である。その後、米軍基地の集約計画により、1974年11月に同司令部は横田基地に移り、現在に至っている。

在日米軍の人員兵力は、陸軍が座間に第9戦域司令部と第17支援群等に約1,900名、海軍が横須賀、三沢、沖縄に所在する艦隊支援部隊及び対潜哨戒部隊等の第7艦隊の一部に約6,900名、沖縄及び岩国に所在する海兵隊に約21,000名、そして空軍は三沢、嘉手納、横田に所在する戦闘機部隊輸送機部隊等の約15,000名の総勢約4万5千余の人員兵力である。

なお、日本に常駐していない、第7艦隊の艦艇や航空機及びその他の米軍部隊が一時的に日本の領域

に所在する場合は、在日米軍である。

在日米軍の任務は、○在日米軍の戦闘能力を保持し、米軍の前方戦略を支援し、○日米相互協力及び安全保障条約に基づき、日本政府との相互防衛協力を推進し、○極東地域における日米両国の国益を守り、任務遂行能力を維持することである。

第5空軍司令官は、在日米軍司令官を兼ねているが、在日の陸軍・海軍の部隊に対しては、部隊運用上の指揮権はなく、行政管理上の責任のみを有している。

司令部は、約180名の幕僚により第1部（J1）から第6部（J6）までが編成されている。

J1（人事）は、日本に所在する米国防省所属の人員、その家族及び退役軍人等の管理監督。日米両国政府間の駐留軍労務者の労務費分担に関する管理運営。

J2（情報）は、在日米軍を代表して、日本における統合の米軍情報及び対情報計画等の作成、調整。

在日米各軍との情報収集要求計画に関する駐在武官及び米国政府機関との連絡保持。本国政府に対する軍事情報の提供に関する調整。

J 3 (作戦) は、日本との共同防衛のための統合及び連合作戦について、司令官、副司令官、参謀長に対する補佐。潜在する地域内偶発事態に対する独自の、又は、共同の対処の準備。統合及び自衛隊との共同の防衛計画と演習に関する米軍部隊の指揮。米国大使館、防衛庁及び他の日本政府機関との運用上の連携の保持。

J 4 (後方) は、後方活動の方針、計画及び運用に関する開発、調整、実施についての司令官に対する補佐。

J 5 (計画) は、日米安全保障条約に関する支援日米地位協定の管理運営。

J 6 (指揮統制、C 4 システム) は C 4 システムを管理運用しての統合及び共同作戦に対する戦略的指針の提供。

以上が在日米軍司令部の概要であるが、陸軍主体の在韓米軍が韓国防衛の意味合いが強いのに対し、海兵隊や海・空軍が中心の在日米軍は、日本に前方展開することにより極東地域での紛争を抑止すると共に、紛争発生時には緊急展開部隊としての役割を担うため、その要の司令部として不断の活動が続けられている。

なお、日本政府は在日米軍に、一時使用を含め約 130 ヶ所の施設・区域を提供すると共に、その駐留経費の一部として、毎年、防衛予算の約 1 割程度を負担している。

在日米軍空軍基地のトピックス

横 田

日米友好デー

- 7月1日は各地で日米友好デーが開催されたが、横田基地でも色々な行事が行われ、地域の市民 350 人が参加した。朝から多摩ヒルでのゴルフトーナメントや基地内の史跡探訪ツアーが行われた。夕方からは、飲食のサービスの後、アメリカンフォークダンス、バンド演奏、剣道模範試合、津軽三味線の演奏等盛大に行われた。

救難活動

- 8月6日の大韓航空機のグアム島での航空機事故に際し、横田基地所属の第3空輸飛行隊の C-9 輸送機及び第 374 医療群の外科医、看護婦等が派遣され災害救助、医療支援を行った。7日に事故犠牲者 6 名を、8日に負傷者 11 名をグアム島から韓国へ輸送した。

エア・フォース・ボール

- 9月11日に都内のニュー・山王・ホテルに於いて、第 374 輸送航空団司令兼横田基

地司令のブライディング大佐の主催によるエア・フォース・ボールが第5空軍司令官ホール中将や村木空幕長以下約400名の参加者の下に盛大に行われ、当協会からは村松、長谷川両副会長と大橋理事が招待されて参加した。今回は特に米空軍創立50周年を祝うイベントとして、太平洋空軍音楽隊により米空軍の歴史を回顧するアトラクションと、続いて米本国から来られたロビー・ライズナー退役准将による記念スピーチが行われた。同准将は1922年生まれ、朝鮮戦争においてはMIGを7機撃墜してエースになり、ベトナム戦争では、捕虜(POW)としての経験を持つ真の歴戦の勇士であり、特に、北ベトナムの捕虜収容所での苦難に満ちた生活の様子や停戦により釈放されて迎える飛行機に乗る時の感動などの体験談は誠に感銘深く、スピーチが終了した時には参加者全員が起立しての拍手が暫し鳴り止まず、創立50周年を飾るに相応しい光景であった。

嘉手納

—— 平和の園

- 嘉手納に駐留する第18航空団は、目立たない存在となっていた日本軍降伏調印式跡地を、空軍創設50周年を記念して大々的に改修し、Peace Garden(平和の園)と命名した。当協会は本庭園建設に当たり12個の庭石を寄贈し、これが樹木と共に中央の碑銘を取り囲み、“日本風”を醸し出す重要な役割を果たしている。

ベーカー准将主催の開園式はホール第5空軍司令官、西川南混団司令、原島沖繩大使及び近隣市町村長臨席のもと、9月18日午前9時から現地で厳かに執り行なわれ、当協会からも長谷川副会長が参列した。ベーカー准将は式辞の中で、この庭園を戦後

の日米協力・友好の歴史を偲ばせる場所として将来の平和に役立てようと呼び掛けた後、直接造園に当たった部隊及び個人を賞賛すると共に、JAAGAからの協力を感謝の意を表明した。



三 沢 ——— 米空軍創立 50 周年記念式典

- 平成9年9月12日夜、三沢基地NCOクラブにおいて、35航空団司令ライト准将主催による米空軍創立50周年記念式典（AF BOWL）が開催され、JAAGAからは松村副会長が参列した。

式典は、ホール第5空軍司令官夫妻及び空自からは第3航空団司令夫妻、北警団司令等の臨席のもと、参加者が約1,000人にも及ぶというパーティであったが、整齊かつ和かに執行された。

特に本式典では、開会直後に、ライト准将からJAAGAについて極めて好意的な紹介が行われたうえ、スピーチの機会も設けていただいた。JAAGAによる三沢基地における日米友好に功労のあった下士官、空曹に対する表彰はスピーチにひきつづき実施したが、タイミングも良く参加者にJAAGAの「願い」を強く印象づけることができた。



小川原湖にキャビン

- 7月、米空軍三沢基地司令のライト准将は、基地湖岸の水泳場に出来上がったキャビンを訪ね、前3空団司令の林将補や日米航空団の基地業務群司令のドナ大佐、外園1佐等と完成を祝った。これは、林将補が、飛行安全上の理由で伐採された滑走路端の杉の木を有効活用し、日米両航空団共同でキャビンを建てようと発案したものである。12フィート・26フィートのキャビンには電気、水道、冷房の施設があり、アウトドアのリクリエーションに利用される。